



山陰地方における鉄器の導入と社会の変革

池淵 俊一（島根県教育庁文化財課）

1. 山陰における弥生時代鉄器普及の諸段階

当地での鉄器の普及は、弥生時代中期中葉までは舶載鋳造鉄斧片等が散見されるにすぎず、中期後葉から本格化する。この時期の鉄器は島根県国竹遺跡例など、山間部出土の大型板状鉄斧が目立つ。これらの鉄器は広島の塩町式系土器を伴う例が多く、瀬戸内方面からの鉄器流入ルートを示唆する。その一方で、青谷上寺地遺跡では舶載鋳造鉄斧片を片刃の板状鉄斧に転用した資料が一定量存在し、この段階に瀬戸内方面からの流れとともに、日本海側からの鉄器流入も本格化したことが窺える。またこの段階の袋状鉄斧には稚拙なつくりのものが存在することから、在地での生産が想定される。

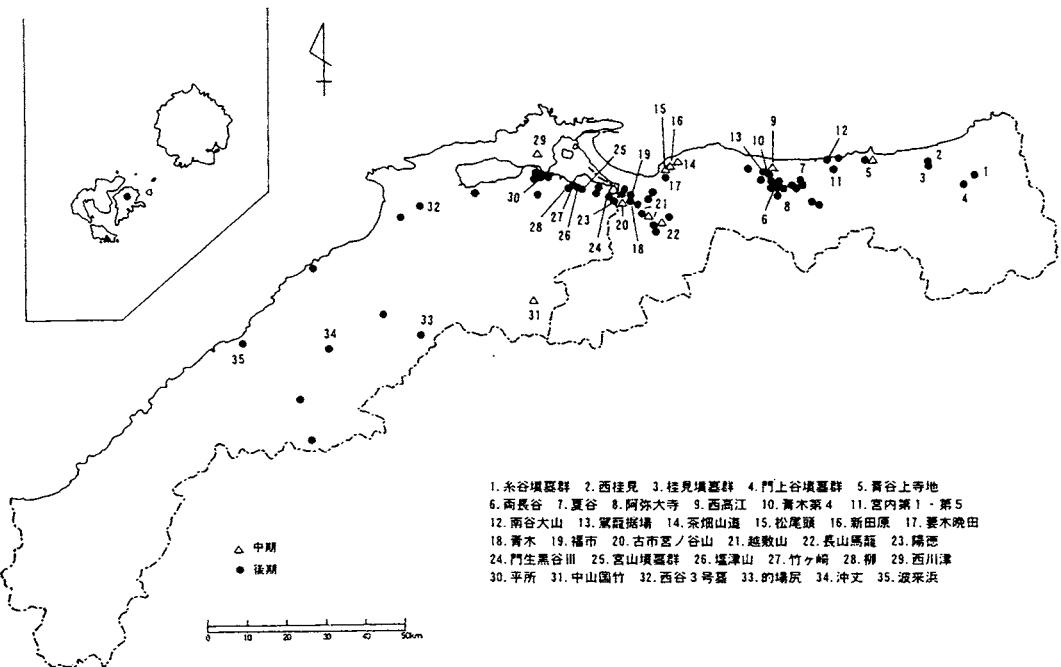
後期前半には一部の器種を除いて石器はほぼ消滅する。また鉄鎌に無茎三角形式が目立つようになるなど、当地の鉄器生産が顕在化し、地域色が認められるようになる。次の後期後半～末には当地の鉄器出土量は急増し、特色ある鉄器文化が成立する。

2. 山陰の弥生時代鉄器の特色

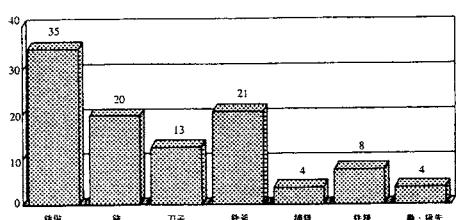
山陰の弥生時代鉄器の特徴としては、まず組成の面からは、鉄斧が多い点、鉄製鋤・鍬先が安定して認められる点等を指摘できる。ただし、妻木晩田遺跡や青谷上寺地遺跡など鉄器多量出土遺跡の様相をみると、鉄器組成にかなり差があり、同じ山陰でも生業形態や立地条件によって器種のウエイトが異なる状況が認められる。器種ごとの特徴をみると、鉄斧では板状鉄斧と同程度もしくはそれ以上に袋状鉄斧が普及し、東部瀬戸内・畿内とは一線を画す地域性を形成する。鍬は身部が断面矩形で身部と刃部幅が変わらないタイプが主流を占め、また身部が幅広のタイプが一定量存在する。また鉄鎌は無茎三角形式が主流を占め独自の型式変化をなし、瀬戸内地域とは一線を画す。舶載鉄器が多く認められるのも当地の特徴で、中期からの舶載鋳造鉄斧のほか、大型の刀剣類が墳墓副葬品として目立つ。特に大刀は現状では環頭を裁断した大刀のみで占められ、同じ舶載大型武器である素環頭刀の出土が目立つ丹後・北陸とは異なる様相をみせる。

3. 山陰における弥生時代後期の社会変化

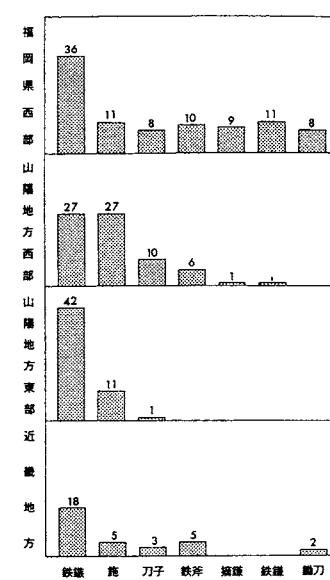
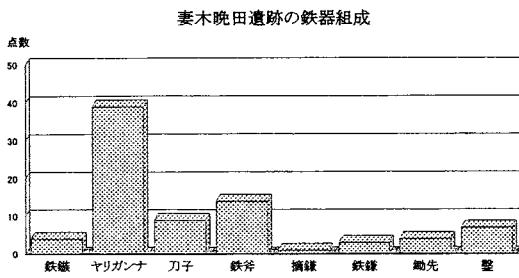
山陰では縄文時代後期以降、打製石器の主たる素材としてサヌカイトが安定して供給されており、弥生時代中期後葉段階でもかなりの比率を占めている。弥生時代中期においては、このサヌカイトを介した瀬戸内との交渉が唯一安定した領域外との地域間交渉であった。弥生時代後期の急速な鉄器の普及は、こうした縄文時代後期以来の当地の安定した物流システムを崩壊させ、当地の集落成員の外部領域観を大きく変質させたものと考えられ、当地の土器様相が中期の瀬戸内的な様相から脱却し、独自の様式を成立させていく要因もここに求められる。この時期に出雲地方では多くの高地性集落が出現する。山陰で鉄器が多量に出土する集落は、内海やラグーンを見下ろす丘陵上に立地するものが多く、外部との交易に有利な場所に集落を構え、鉄をはじめとする必需物資の流通を差配しようとした意図を読みとることができる。このように当地の高地性集落の出現は、中期段階の安定した流通関係・外部領域観が崩壊し、新たなシステム・地域社会が再編されるプロセスにおける不安定な状況を反映しているものと想定される。こうした状況下で地域単位の求心力が求められるようになり、その脈絡において西谷3号墓のような巨大首長墓の出現を理解することが可能となる。



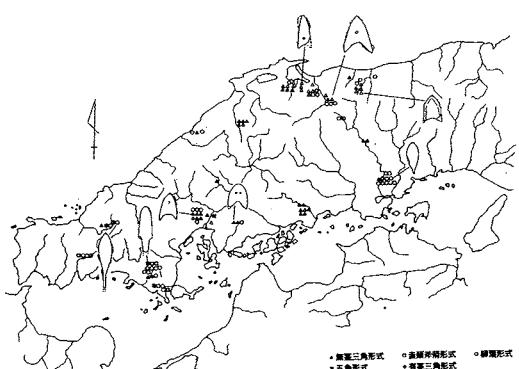
山陰地方の弥生時代鉄器出土遺跡分布図（高尾 2001）



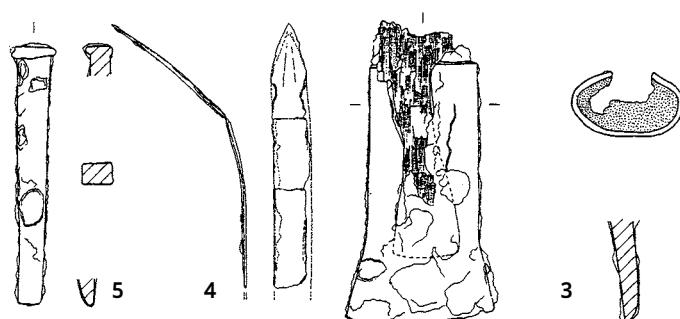
島根県内の弥生時代鉄器主要器種別出土数
(資料は川越編 1999 をもとに一部新出土発表資料を含む) (池淵 2000)



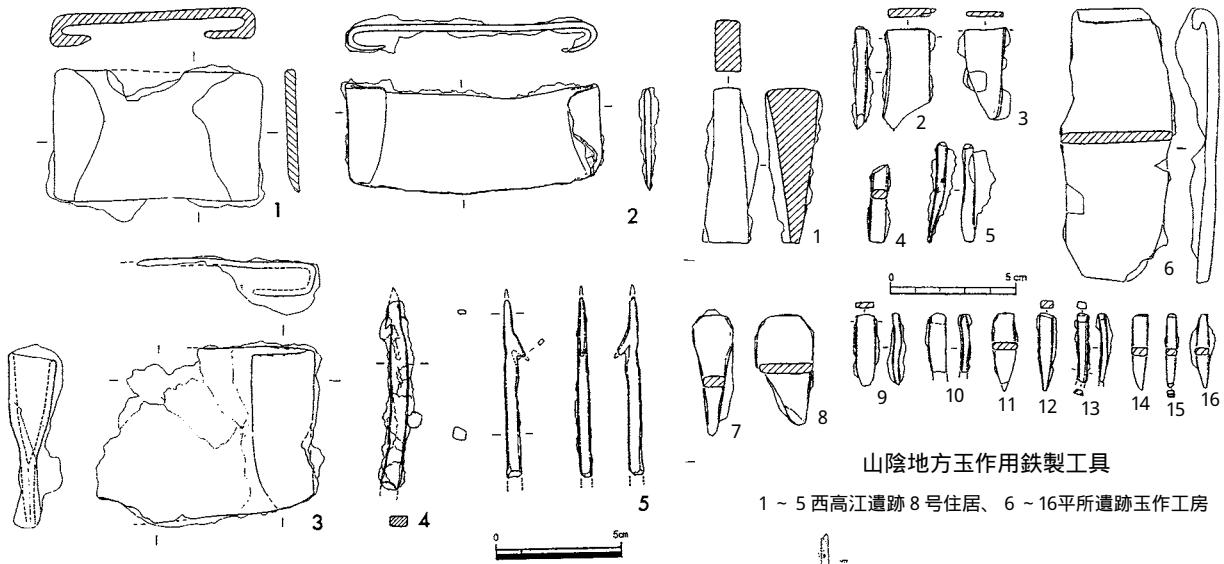
西日本における弥生時代
鉄器器種別出土数
(野島1993を一部改変)



中国地方における弥生時代鉄鎌型式別分布図
(野島 1993 に一部加筆) (池淵 1998)

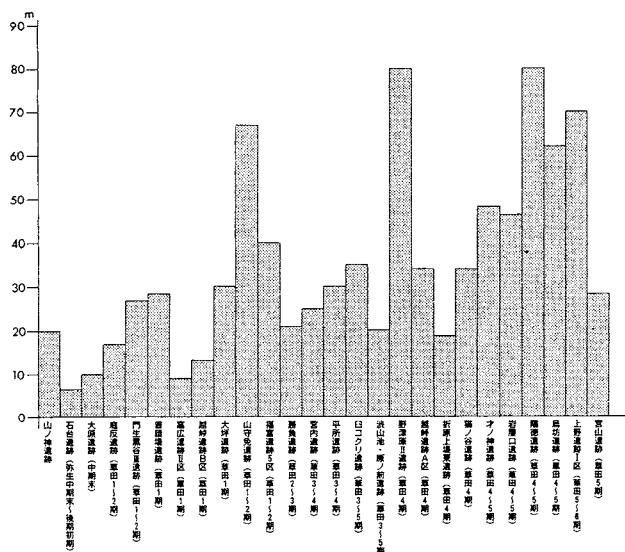


弥生中期の鉄器
(1 島根・西川津、2 島根・国竹、3・5 鳥取・長山馬籠、4 鳥取・青谷上寺地)

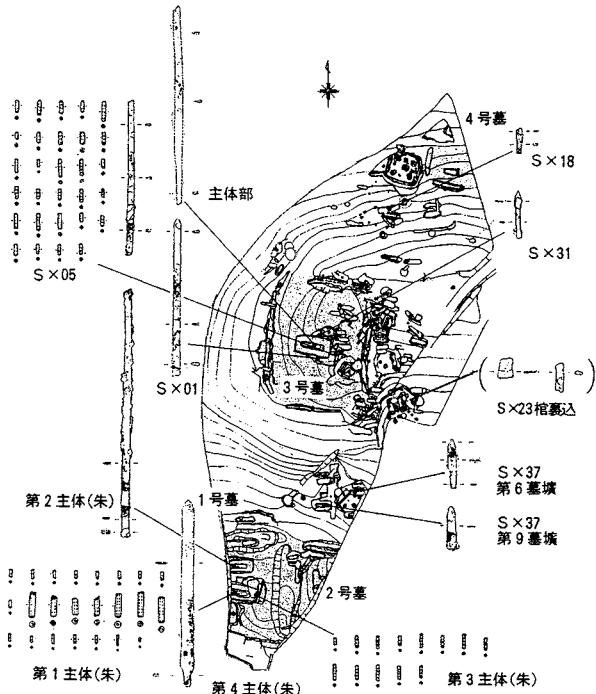


山陰地方に特徴的な鉄器群

1 島根・竹ヶ崎、2・5 島根・青谷上寺地、3 鳥取・妻木晩田
4 鳥構・沖丈



出雲における弥生時代中期末～後期末の集落の立地（単位m）（池淵 1998）

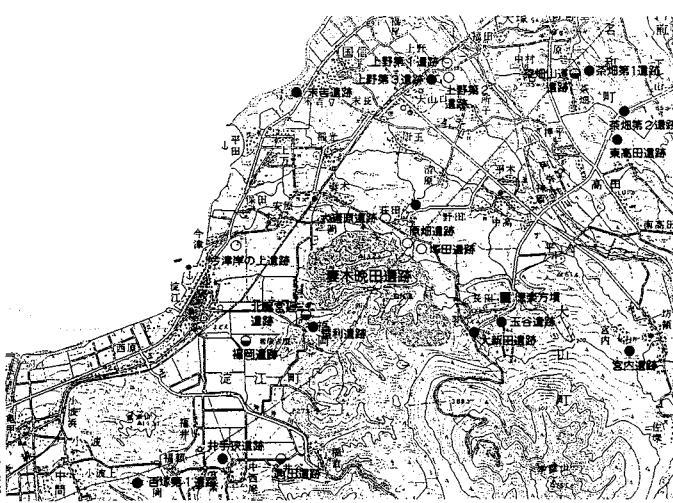


山陰の鉄器を副葬する方形台状墓（宮内第1遺跡）

山陰地方鉄器多量出土集落の立地



鳥根・塙津遺跡群



鳥取・妻木晚田遺跡